412 TSH受容体抗体が陽性を示した甲状腺癌術後転移例の検討

御前 隆、笠木寛治、岩田政広、MSアラム、小西淳二（京大核）

TSH受容体抗体はバセドウ病や一部の甲状腺機能低下症の原因となる。我々はこれまでに甲状腺全摘後、転移巣に放射性ヨード(RAI)治療を行なった癌症例8例にradioreceptor assayでTSH結合阻害活性を持つ抗体(TBII)を検出した。6例はcAMP産生を指標とする甲状腺刺激活性(TS Ab)が陽性であり、うち4例は過去にバセドウ病の治療歴があり、1例は不詳、1例は癌転移巣への放射性ヨード治療後にTBII, TSAbとも陽性化して甲状腺機能亢進症が生じており、転移巣の過機能が受容体抗体で刺激されたものと考えられる。他の2例はTSHによるcAMP産生を抑制する活性を示した。これらの抗体がRAIの治療効果や予後にどのような影響を及ぼすか興味深い。

413 I-131治療後の甲状腺機能亢進症に対する少量の無機ヨードの効果

西井規子,金谷和子,金谷信一,寺田慎一郎,池上晴彦,百瀬 満,小林秀樹,牧 正子,日下部きよ子(東女医大放)

I-131治療後の中毒症状の改善を目標に,少量のIodolecithin(ヨード200μg/日)を投与し,その効果を評価した.I-131治療後1ケ月以降で亢進症状の強い50例を対象とし,症状の軽快したものを有効群,持続・増悪したものを無効群とした.有効群(52%)では,Iodolecithin投与前のFT3,FT4値は低値な傾向にあり,1-2ケ月後に症状の改善と共に無効群に比し有意に低下した.さらに有効群のFT4値は3-4ケ月後にほぼ正常値となった.Iodolecithin少量投与の効果は,短期間のホルモン値の観察によりある程度予測することが可能で,中毒症の持続する症例に対して試みるべき方法であることが示唆された.

414 バセドウ病による甲状腺機能亢進症のI-131治療における効果と線量依存性

金谷和子、日下部きよ子、西井規子、金谷信一、寺田慎一郎、牧正子、山崎統四郎（東女医大放）

甲状腺重量とI-131吸収線量がバセドウ病のI-131治療効果に与える影響について検討した。1994年10月～1996年5月までに治療を施行した33例を対象とした。Tc-99m-04を用いたシンチグラムからAllen-Goodwin法で算出した甲状腺重量と超音波で測定した重量との間に明かな差はなかった。正常機能に移行したのは60Gy以下の線量の症例の71%、60-80Gyの71%、80Gy以上の50%であった。再治療を要した症例は60Gy以下の28.6%、60-80Gyの17.6%、80Gy以上の40%で、低下症に至ったのは60-80Gyの11.8%、80Gy以上の10%であった。治療効果は吸収線量に依存しないが、小さい重量では70Gy以下の線量が適当であった。

415 甲状腺機能亢進症に対するI-131治療遠隔成績の検討

内山眞幸，荻 成行，福光延吉，森 豊（慈大放）

甲状腺機能亢進症に対するI-131治療は再燃の防止と甲状腺機能の長期温存との双方を目的として行われている。当院に於けるI-131治療遠隔成績を検討したので報告する。対象は当院にてI-131治療を行い5年以上経過観察中の40例で最長観察期間は21年である。40例中9例は現在まで無治療であり、観察期間は8~13年であった。14例にチラジン補充を行っており、投与開始は治療後6カ月~16年で、5例は10年後以降より開始している。16例は抗甲状腺薬を併用している。1例で12年後に再燃し再投与した。TSHレセプター抗体が正常化するのは治療後6カ月~14年、平均6.6年であった。40例中9例が治療後10年は服薬不要であったが、一方少量の抗甲状腺薬を併用している症例も多く、積極的な再投与を今後検討していきたい。

416 橋本病および単純性甲状腺腫患者における血中サイログロブリンおよびペルオキシダーゼ自己抗体の検出；高感度ラジオアッセイによる検討

笠木寛治、SMアラム、御前隆、小西淳二（京大核）

生検により得られた組織診により橋本病と単純性甲状腺腫の診断が得られた症例において、コスミック(コ)社および栄研(栄)社のラジオアッセイキットを用い、抗サイログロブリン抗体(TgAb)および抗甲状腺ペルオキシダーゼ抗体(TPOAb)を測定した。橋本病における陽性率はTgAb(栄)が100%(71/71)、TgAb(コ)が98.6%(70/71)、TPOAb(栄)が98.6%(70/71)、TPOAb(コ)が76.1%（54/71)であった。一方、単純性甲状腺腫においてはコ社のTgAbおよびTPOAbアッセイが3.7%(1/27)と低い陽性率を示したのに比べて、栄社のTgAbおよびTPOAbはそれぞれ29.4%(8/27)および48.1%(13/27)と高い陽性率を示した。

417 ヨードシンチにおけるThyroid bed集積の検討

久山順平， 内田佳孝， 太田正志， 宇野公一， 伊東久夫（千大放）

甲状腺全摘後に、前頚部に生理的なヨード集積を認める"Thyroid bed"集積は、局所の再発巣への集積との鑑別が困難な所見である。我々は分化型甲状腺癌全摘術後にヨードシンチを施行し、他の画像診断とも合わせ、局所再発なしと判定された64例でThyroid bed集積の性状・再発巣への集積との鑑別の可能性を検討した。Thyroid bed集積出現は、64例中42例(66%)、形態は腫瘤型18例、甲状腺輪郭型12例、辺縁不明瞭型12例だった。血中TSH値とThyroid bed集積の有無の間には相関は認められなかった。一方局所再発を認めた21例では18例で前頚部に集積が認められた。その集積は腫瘤型と甲状腺輪郭型に限られ、複数回のヨードシンチを施行した例では、必ず前回集積よりも強い集積を認める、等の特徴が認められた。

Presented by Medical*Online